



「母になる」喜びをめぐる

卵子提供

精子提供

代理出産

# 生殖医療の

て「生きる希望」ができたと感じています。子どもがほしいと強く感じていながらも、病気のために恵まれず現在も苦しんでいる人が大勢います。そういう人々の希望になれば幸いです。最後に、「ドナー」となっていたいただいた方に深く感謝しております……」岸本さんが、この活動を始めたのには理由があった。

「実は私の娘が『ターナー症候群』と診断され、そこから家族会を立ち上げた経緯がもたっているんですよ」

ターナー症候群とは、低身長、卵巣機能不全を主な症状とする女性の疾患だ。染色体の欠失による先天的な疾患で、二次性徴（月経）が来ない。

「ほとんどの方が妊娠できないため、海外で卵子提供を受けて出産した人もたくさんいます。ただ、高額でなかなか手が届かない。卵子提供が国内でできたら、というたくさんさんの声があったのでOD-NEETを立ち上げました」

定されている。

## 渡米は「妊活最後の砦」

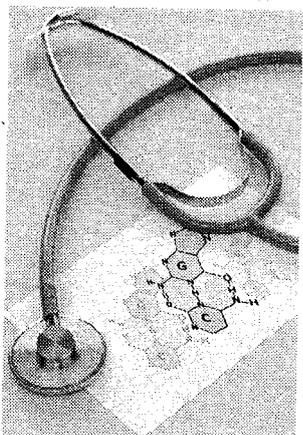
自民党の野田聖子衆院議員は10年、アメリカで卵子提供を受けて体外受精を行い、50歳で妊娠・出産している。同様に、卵子を求めて渡米する日本人女性は数多い。

「アメリカの14年の統計では、全米で16万件あった体外受精のうち、2万件がドナーによる卵子提供でした」

そう語るのは、アメリカ・サンフランシスコで22年前から、日本人に向けて卵子提供や代理出産をコーディネートしている「IFC」の川田ゆかり代表である。

「最近では年間約100組をコーディネートしています。依頼者の8割が40代の女性です。日本でも不妊治療を受けてきて、どうにもならずに最後の砦として卵子提供を選ばれるようですね。1回の採卵で複数個の受精卵が得られるので、凍結保存をして2人目を希望される方も多いですね」

卵子を提供するのは、日本国内外在住の満21歳以上、30歳未満の日本人女性である。登録されると、依頼者夫婦がドナー情報を閲覧する。そこには、顔写真、身長・体重、一重か二重か、健康状態、血液型をはじめ、詳細なドナーのプロフィールが記さ



れている。この「お見合い」が成立すると、ドナーはアメリカで採卵することになる。

「奥様と身長や体重が似ているドナーを選ぶ傾向がありますね。また、日本人の方は、血液型を気にすることが多いです。私たちは子どもが小さいうちから何となく、特別な形で生まれてきたことを伝えていくように推奨しています。ママのお腹から生まれてきたことをきちんと伝え、マタニティー写真を必ず撮って

おいてもらうようお願いしています。言葉とスキンシップをちゃんととして、愛情表現をしておけば、事実を話しても理解してくれるはずなんです」

こうした真摯なサービスの一方で、代理母出産、精子提供を謳う悪質な情報がネットに氾濫しているのも事実だ。

## 卵子・精子提供の「当事者」は誰か？

さらに「先端技術」は、予想しなかった問題も引き起こしている。それは、誕生した子

どもの成長とともに露見し始めた。

「臓器移植なら、ドナーと患者1対1の関係ですが、生殖医療の場合、ドナーと受ける依頼者、そして新しく生まれる子どもという存在がある。彼らはまさに当事者にほかならない。なのに、本人の同意が取れないことがさまざまな問題を明るみにしました」

そう指摘するのは、生殖技術の発達が社会に及ぼす影響などに詳しい慶應大学の長沖暁子准教授だ。

「卵子提供で生まれた子どもには遺伝子上の母と産んだ母がいますが、民法上の規定はなく、子どもの法的地位は不安定が残ります。また、妹からの卵子提供で子どもが生まれた後で姉妹関係が壊れてしまったケースなど、予期しなかったトラブルも起きています。さらに、卵子提供には、ドナー、妊娠者ともに健康上のリスクを伴うことも確かなんです」

国内で最初の精子提供によるAIDが行われたのは1949年。これまでに1万人から2万人もの出生児が誕生したと言われているが、実数は定かではない。

「人工授精で誕生した子どもが大人になって、自分が父親

# 生殖医療の光と影



と血がつながってゆいぬいこと  
を知ってしまいうケースが起きて  
きました。家族のトラウマ  
に発展、生まれた子どもたち  
が自助グループを作って意見  
を発信するようになった。子  
どもはなんともなく「うちの家  
族は何かが隠されている」  
と感じるのです。

ある研究者によると、事実  
を知るきっかけは、ひとつは  
親の病気が死亡、2つ目が離  
婚、3つ目が何か変だと思っ  
て聞いたことでした。  
ただでさえ家族の危機的な状  
況で、自分が生まれたいきさ  
つを知ってしまう。ダブルの  
ショックで、よけい混乱して  
しまわんのです。

これまでは、精子提供で人  
工授精を行う医師でさえも  
「子どもには告知しなくても  
大丈夫」と言ってきたという。  
「通常、自分がAIDなどで  
生まれたなんて想像がつかない

い。だから、すごく傷を抱え  
てしまう。子どもにとって社  
会の入り口は親。父と母がい  
て自分がいるという社会です  
ね。その根本が崩れる。そこ  
からすべてを作り直していく  
のは大変なことですよ。

最近では、AIDで子ども  
を持つとする親の会では、  
「子どもたちに事実を告げて  
いこう。血のつながりのない  
家族があってもいいんだ」と  
いう人たちも出てきました」

子どもの出自に関して世界  
の潮流が変わったのは、19  
79年の国際児童年に「子ど  
もの権利条約」ができてから  
だと長沖准教授。

「日本ではAIDで生まれた  
子どもしか発言していない状  
況ですが、アメリカでは卵子  
提供で生まれた子どもも発言  
し、技術を批判しています」  
生殖医療を選択した女性で  
も、ドナーでもない「当事  
者」は何を思うのか。その声  
は、想像以上に切実だった。

## 「普通」であるため に使われる技術

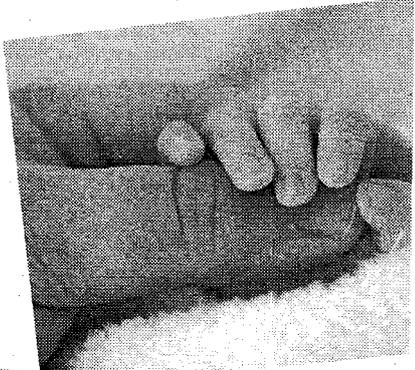
その人は雑踏の中から喫茶  
店に入ってくる。こちらを見  
つけて軽く会釈をした。女  
性の名前は石塚幸子さん  
(37)。清楚なスーツに身を  
包んだ石塚さんは、出版社勤  
務だ。

彼女が、自分がAIDでこ  
の世に誕生したことを知った

のは、23歳のときだった。  
「きっかけは父の病気でし  
た。父は筋ジストロフィーと  
いう重い病気を患っていて、  
その病気が子どもに遺伝する  
かどうか悩んだことが、私の  
出自の秘密を知るきっかけに  
なってしまったのです」

悩む自分に母親が告げたの  
は、父親とは血がつながって  
いないということだった。  
「変な話、最初は少しホッと  
しました。病気が遺伝しない  
とわかったのです。同時に他人  
の精子で子どもをつくるとい  
う技術に驚き、さらに大好き  
だった母が、こんな大事なこ  
とを23年間も黙っていたこと  
もショックで……。悲しかっ  
たのは母に、なんで悩む必要  
があるの?と責められたこ  
と。きっと母としても後ろめ  
たかったのでしょう」

私は隠したいような技術で  
この世に生まれたの——?  
当時、大学院で地質学の研究  
に取り組んでいたが、  
「AIDや体外受精という言  
葉で頭がいつぱいになり、研  
究どころではなくなりまし  
た。環境を変えて1度リセッ  
トしたかった。そこで家を出  
て、大学院もやめたのです」  
彼女は、精子提供者に1度  
でもいいから会いたいという。  
「その人の身長・体重・学歴  
が知りたいわけではなく、ち  
やんと実在していたかどうか  
を知りたいから。母親と精子



というモノではなく、実在し  
た人間がいるということを確認  
したいだけ。幼いころに知  
らざればいれば、こんなにシ  
ョックにはならなかったはず  
です。大切なのは、血はつな  
がっていないけれど私たちは  
家族で、ここに一緒に暮らし  
ていること、だから信頼して  
暮らしていこう。そう告げて  
ほしかった。

私たちがAIDの自助グル  
ープを作ってから、養子を育  
てている人たちとも意見を交  
わしました。彼らは物心つく  
前に告げるほうがいい、と言  
います。楽しいことがあつた  
とき、例えば3歳の誕生日の  
お祝いするときなどに伝える」  
石塚さんが出生の秘密を知  
ったのは若い時期だったが、  
ほとんどのケースではかなり  
遅くなってからのことだ。つ  
まり、結婚し、子どもが誕生  
したあとに知った人たちも多  
い。

彼女に、結婚と出産をどう  
考えるか尋ねると、  
「結婚はしないと思う。子ど  
もに



もに關しては、まったく欲し  
いと思わない。自分の遺伝子  
を残したくない。自分が感じ  
た不明な感覚を自分の子ども  
に味わせたくないんです」  
石塚さんは、この問題の根  
底に「普通」という問題が横  
たわっているという。

「結婚したら、子どもを産む  
のが普通」という価値観のた  
めに、これらの技術が使われ  
ているような気がします。き  
つと、ガイドラインやルール  
が誕生したとしても、日本で  
は告知は進まないと思います。  
だからこそ、私が声を大にし  
て言いたいのは、精子提供、  
卵子提供という方法を選択す  
る前に、もつともつと考えて  
ほしい、それだけなんです」  
女性特有の乳がんや子宮が  
んには遺伝性のもも多い。  
遺伝子が注目される昨今、そ  
こから出自の問題に遭遇する  
機会もあるだろう。今後、さ  
らに議論を深めな  
ければいけない問  
題に違いない。



取材、文、小泉カツミ、イラスト、シロライター。医療、芸能など幅広い分野を手がけ、著名人へのインタビューも多数。著書に「産めない母と産みの母〜代理母出産という選択」ほか多数